

# 居場所

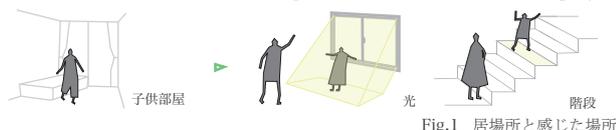
流れの中によどみをつくる

指導教員 吉松秀樹教授 印

8AEB1102 熊谷 亜耶

## 1. 問題意識「居場所の存在」

幼い頃、スポットライトのように光が落ちてくる場所や、階段でよく遊んだ。そこは「〇〇をする部屋」として存在しなくても「居場所」として存在していた (Fig.1)。



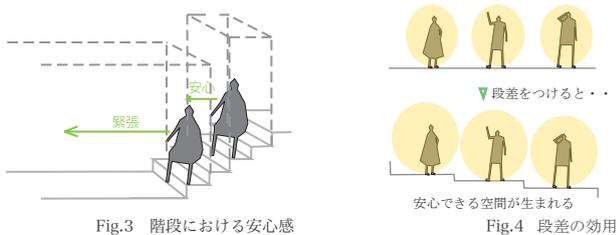
## 2. 調査「待ち合わせ」

駅構内を多くの人々が通り過ぎていく中、待ち合わせをするため人の流れを避け、安心できる場所を探す様子は、自ら「居場所」を選んでいる行為だと感じた (Fig.2)。



Fig.2 居場所を選ぶ人々

階段での居場所を考えてみる。広い空間につながる最終段は、管理する空間が広く緊張感があるが、中段では小さな空間となり安心感がある (Fig.3)。壁はなくても段差をつけて空間を分節すると、安心感が得られる (Fig.4)。



## 3. 分析「よどみ」

安心できる場所に留まる人の姿に、水が流れずに溜まる所を意味する「よどみ」を感じた。そこで、大きなひとつの空間 = 流れる川とし、居場所をよどみと置き換えてみる (Fig.3)。川にもよどみにも水が存在するが、全く同じ水ではなく違いがある。わずかに他の空間と区別した場所をよどみと定義する (Fig.5,6)。



## 4. 手法「光とゆがみ」

わずかな違いを感じ取れるようなきっかけを光と段差でつくり、よどみをつくる。豊島美術館は、大きな穴を開け場所性をつくった (Fig.6)。それに対し、天井に小さな穴を開け、集合させる場所とそうでない場所をつくる。穴が多い場所は明るく、わずかな空間の違いを出しつつ場所性をつくりだす (Fig.7)。

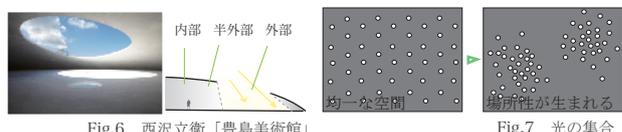


Fig.6 西沢立衛「豊島美術館」

Fig.7 光の集合

床においては、ゆがませることにより段差をつけ、わずかに違いを出す (Fig.8)。このゆがませる度合いを変えることで、複数の行為が可能な居場所ができる (Fig.9)。

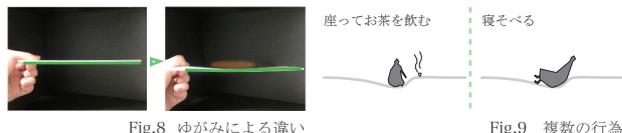


Fig.8 ゆがみによる違い

Fig.9 複数の行為

## 5. 提案「居場所を選ぶ空間」

ワンルームに手法の「光とゆがみ」を用いることにより、空間を仕切らずに個人空間が持てるスペースを設計する。人々はわずかな違いを感じとり、よどみ、つまり居場所をつくる。何に使う場にするか自ら創造することで、従来の部屋割りにとらわれない「居場所を選ぶ空間」を提案する (Fig.9,10,11)。

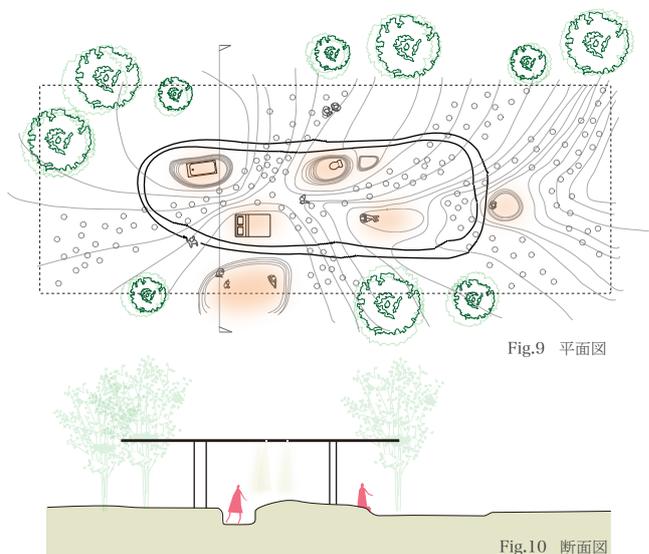


Fig.9 平面図

Fig.10 断面図